

ヘモプラズマによる貧血を繰り返し末期に骨髄腫関連疾患を発症したFIV陽性猫の1例

○大池三千男

1) おおいけ動物病院・帯広

【はじめに】猫のヘモプラズマ症（旧ヘモバルトネラ症）はマイコプラズマが赤血球に寄生し溶血性貧血を起こす。また、猫の骨髄腫関連疾患（Myeloma-related disorders, MRD）は、単クローナル性 γ グロブリン（M蛋白）増加症が認められる各種疾患や髄内および髄外形質細胞腫瘍を包括する疾患名として提唱されている呼称である。今回FIV陽性でヘモプラズマによる貧血を繰り返していた猫が4年弱の闘病末期にMRDを発症したので、その概要を報告する。

【症例】日本猫、11歳齢、体重3.9kg。過去に他院でFIV陽性診断。当院にて半年前からインターフェロンや輸液等の対症療法を実施。歯石除去の為に血液検査を実施したところ、軽度貧血（PCV27%）を認めた。（第1病日）

【治療および経過】

- 1) 第24病日PCV21%と減少し、末梢血でヘモプラズマ及び单球とマクロファージによる赤血球貪食を確認した。
- 2) ドキシサイクリン6.25mg/kg BID投与4日間でPCV34%まで増加したが、嘔吐と食欲不振、肝酵素の上昇で中止。
- 3) 第174病日PCV25%と再発。Candidatus Mycoplasma haemoninutumとCandidatus Mycoplasma turicensisが陽性。
- 4) ドキシサイクリン6.25mg/kg SID 12日間投与、第186病日にはPCV31%に回復したが、再び肝酵素が上昇した。
- 5) 貧血（PCVの低下）に伴いLDH（2型アイソザイム）の上昇が認められ、溶血による上昇と診断した。
- 6) 再発期間は、146日、258日、90日、67日、119日・・・112日、65日、21日、34日、7日、3日と短縮した。
- 7) 1,402病日にTP9.5g/dlと上昇し、M蛋白血症を認め、第1,406病日には脾腫を確認、MRDと診断した。
- 8) 赤血球、白血球及び血小板が減少し、プレドニゾロンとメルファラン投与で脾腫は改善したが、第1425病日死亡。

【考察】本症例はFIV陽性で、ヘモプラズマ症の末期にMRD（髄外形質細胞腫）を発症した。溶血によるLDHと2型アイソザイムの上昇は、治療の指標となった。脾臓は赤血球に寄生する病原体に対する主要な防御の場であり、赤血球からのヘモプラズマの除去（ピッティング）や主にマクロファージによる赤血球貪食が亢進する。末梢血液におけるマクロファージによる赤血球貪食は珍しい所見であった。一方、単クローナル性 γ グロブリンの増加は、長期闘病の結果血管外溶血の場であった脾臓において腫瘍化した形質細胞によるヘモプラズマに対する抗体と考えられた。